

修士論文（要旨）

2020年1月

日本語の形容詞連用形に関する研究  
－並列用法を中心に－

指導 青山 文啓 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

217J3906

林晶

Master's Thesis(Abstract)

January 2020

A Study of Adverbial Form of Adjectives in Japanese:  
With a Special Reference to Conjunctive Uses

Jing Lin

217J3906

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Fumihiro Aoyama

## 目次

第1章	はじめに.....	1
1.1	形容詞の三つの用法.....	1
1.2	形容詞連用形の並列用法.....	1
1.3	形容詞のテ形.....	2
1.4	形容詞か副詞か.....	3
1.5	本稿で扱う用例.....	4
第2章	形容詞連用形の並列用法.....	6
2.1	連用形の並列：[A1p][A2p]V.....	6
2.2	連体形の並列：[A1p][A2p]N.....	8
2.3	連体形内部の並列：[A1p・A2]p N.....	10
2.4	連体形内部の従属：[[A1]p A2]p N.....	13
第3章	形容詞のテ形.....	16
3.1	後続動詞と並列される場合.....	16
3.2	“連体形内部の並列”の場合.....	16
3.3	文の区切りとして働く場合.....	17
3.4	その他.....	18
第4章	おわりに.....	19
参考文献		

形容詞の用法について、橋本/青山(1992)は終止用法、連体用法、連用用法があると指摘している。しかし、形容詞連用形の場合、「ワインをおいしくいただく」のように、いわゆる連用用法以外、「安く美味しいお米」「恐ろしく深い穴」のような並列用法がある。本稿は形容詞連用形の並列用法を中心に、その用法の解明を試みる。

本稿では『新潮文庫の100冊 1995』から日本人作家の作品10冊を選定し、そこから実例を引用する。補足説明のため、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)から用例を抽出することもある。また、形容詞の定義について、「語幹+イ/シイ」のようなものを形容詞と呼ぶ。「ひどく」のような形容詞が副詞に分類されることもあるが、本稿ではこのような品詞分類の揺れについては追究しない。

本稿は形容詞連用形の並列用法を四つに分類し、その構造を以下のように示す。

連用形の並列：[A1p][A2p]V（高く速く飛ぶ）

連体形の並列：[A1p][A2p]N（貧しい暗い生活）

連体形内部の並列：[A1p・A2]p N（強く美しい心）

連体形内部の従属：[[A1]p A2]p N（おそろしく深い穴）

形容詞連用形が動詞を修飾する場合と名詞を修飾する場合がある。「高く速く飛ぶ」のように、形容詞連用形が並列されて動詞にかかる場合を“連用形の並列”と呼び、その構造を“[A1p][A2p]V”に示す。この場合、A1とA2は単に並列されるだけ、内部には修飾関係がない。また、A1とA2がそれぞれVにかかるため、 $p_1$ と $p_2$ は両方とも連用形の活用語尾である。

一方、形容詞が並列されて名詞を修飾する場合は遥かに複雑である。まず、「貧しい暗い生活」のように、名詞を修飾する場合、形容詞の連体形にも並列用法がある。本稿はこの用法を“連体形の並列”と呼び、“連用形の並列”に似て、その構造を“[A1p][A2p]N”に示す。“連体形の並列”の場合、修飾成分であるA1とA2はそれぞれNにかかり、 $p_1$ と $p_2$ は両方とも連体形の活用語尾である。

しかし、名詞を修飾する場合、「強く美しい心」のように、A1が連用形、A2が連体形になる場合が多く見られる。本稿はこのような用法を“連体形内部の並列”と呼び、その構造を“[A1p・A2]p N”のように示す。この場合、Nにかかる修飾成分“A1p・A2”は先に並列され、次に連体形の形でNを修飾する。A1とA2はそれぞれNを修飾するから、A1とA2の順序が変えられるが、それぞれの活用語尾を変化させなければならない。また、この場合では「安く（て）美味しいお米」のように、A1がテ形になることもある。

最後に、「おそろしく深い穴」のように、A1とA2が従属関係の場合について、本稿は便宜上このような用法を“連体形内部の従属”と呼ぶが、実質上連用用法の一種である。そして、“[[A1]p A2]p N”でその構造を示す。この場合、A1が先にA2にかかり、そして、“[A1]p A2”が一つの修飾成分として連体形の形でNにかかる。“連体形内部の従属”は形態上“連体形内部の並列”と同一だが、その修飾関係が一層深いことが分かる。

上に示すように、本稿は形容詞連用形に着目し、形容詞の並列用法について研究するものである。また、名詞を修飾する場合、並列成分のなかで、前の形容詞が連用形だけでなく、テ形になることもある。そして、形容詞テ形が形容詞連用形の並列用法の一部の機能を分担するために使用される推測した。

## 参考文献

- 秋元美晴(2000)「形容詞の文体論的考察：運用用法を中心に」『恵泉女学園大学人文学部紀要』12
- 井本亮(2009)「形容詞連用形による副詞的修飾関係—モノのサマの修飾関係を中心に(特集 日本語の形容詞とその周辺—意味・機能から)」『国文学:解釈と鑑賞』74(7)
- 大島資生(2015)「現代日本語における形容詞連用形・テ形の機能について」『人文学報』507
- 国立国語研究所(2004)『分類語彙表・増補改訂版』大日本図書
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
- 工藤真由美(2007)『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房
- 坂口頼孝(2009)「程度強調連用修飾語の品詞の扱い」『崇城大学研究報告』35(1)
- 蔣昊(2013)「形容詞の連用形とその中国語訳に見る構文研究」桜美林大学大学院日本語教育専攻修士論文
- 鈴木重幸(1997)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 飛田良文/佐藤武義(2002)『現代日本語講座 第5巻 文法』明治書院
- 中井悟(1974)「形容詞・形容動詞の連用形の副詞的用法：連用修飾語を含む文の基底構造と変形」『主流』(36)
- 橋本三奈子/青山文啓(1992)「形容詞の3つの用法—終止,連体,連用」『計量国語学』18(5)
- 林四郎/野本菊雄/南不二男/国松昭(2002)『例解新国語辞典 第六版』三省堂
- 林雅子(2004)「情態副詞をめぐって」『龍谷大学国際センター研究年報』13
- 林雅子(2006)「様態を表す副詞的表現をめぐって」『龍谷大学国際センター研究年報』15
- 細川英雄(1988)「現代日本語形容詞語彙一覧稿」『金沢大学教養部論集・人文科学篇』25(2)
- 村上佳恵(2017)『感情形容詞の用法：現代日本語における使用実態』笠間書院
- 八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から』明治書院
- 山岡政紀(2001)『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山田忠雄/柴田武/酒井憲二/倉持保男/山田明雄(2005)『新明解国語辞典 第六版』三省堂
- 渡辺実(1983)『副用語の研究』明治書院